

置いた（東洋學報第五卷第四十九頁）、綴本の形になつた佛典も西域考古圖譜回鶻文佛典(3)に依つてその實例を示し得るのみならず、スタイン氏の蒐集の中にも存する、されば若し氏の論ずる所にして支へらるゝならば、一にその内部的證明に據るものであらねばならぬ、自分は伯林の蒐集品を見ないから強くは言ひ得ないが、氏の示す所丈けでは所謂同一書の他の斷片なる言葉に安心して従ひ得ない様にも思はれる、氏は同一人の書であるといふことを強い根據にして、數個の斷片の同一書に屬することを主張して居るけれども、それ丈けの理由ではかゝる斷定は下し難いかと思ふ、然も若し果して氏の主張が正鴻であるならば、これは佛教マニ教の間に於る深い關係を證明するものとして、極めて重要な研究と認めねばならぬ。

五 ソグド文化の東方に及ぼせる影響

厦門地方の曆書に日曜を密と稱するのは解し難いといふことが、一七八一年ドウグラス氏(C. Douglas)によつて *Notes and queries on China and Japan* 誌上に論ぜられ、その後ユーベ氏(Huber)もまた福建地方の曆書に同様の名が存することを述べ且つ之を解釋した(*Bulletin de l'Ecole Francaise d'Extrême-Orient, VI*)。此の間この問題は多くの學者の注意を惹いたのであつたが、その次第はペリオ氏の *Un traité manichéen retrouvé en Chine. J. A. 1913. Jan.-Fev. p. 162-165* に譲つて置く、ワイリー氏(Wylie)は一八七一年 *On the Knowledge of a Weekly Sabbath in China* なる論文を *Chinese Recorder* に掲げて、洪潮和曾孫堂燕通書便覽に同様に日曜日の密と記されてあることを示し、殊にまた乾隆四年編纂の欽定協紀辨方書に七曜の名を記し、之に日曜のたとを